

る大温室をはじめ、園芸や工芸等の各種の実習ができる花の工房、バラ園、あじさい園、つばき園などがあり、年間約17万人の来園者が季節ごとに様々な草花や花木を楽しんでいます。

同園では「府民の花」であるさくらそうの収集に開園当初から力を入れて取り組んでおり、現在の栽培品種数は約370にのぼっています。

また、鉢植えのさくらそうの展示や、栽培したさくらそうの品種苗の販売により、来園者の方々に目で楽しん



▲園内のクリンソウ（サクラソウ科サクラソウ属）

だり、自宅で栽培するなど色々な形でさくらそうに親んでいただいています。

大阪府では、今後とも、「さくらそう」や「うめ」が街のあちこちで楽しめるような、花とみどりいっぱいのまちづくりを進めていきます。

大阪府立花の文化園

[所在地] 大阪府河内長野市高向2292-1

[電話] 0721-63-8739

大阪府立花の文化園所在地地図



田島ケ原のいきもの(No.1)

—アマナ(ユリ科)—

田島ケ原に春の到来を告げる草花の中でも、アマナは一番手でしょう。地下の球根（鱗茎）から葉と蕾を一緒に出し、3月下旬から4月上旬にかけて他の花に先がけて咲き出します。姿がチューリップに似ているので、かつて、日本のチューリップとも言われていました。花は日が当たると開き、日差しがないと閉じてしまいます。小さな花ですが、よく見ると、白い花びら（花被）に濃い紅色のおしべ（葯）が目立って、美しく可愛いのです。群生するので、遠くから見ると白い布を敷いたようにまとまって見えます。残念ですが、サクラソウの花の盛りには、アマナの花は終わって実になっています。



(市文化財調査専門員 磯田 洋二)

「田島ケ原サクラソウ自生地」で愛護活動をしていただけるボランティアを募集しています

田島ケ原のサクラソウ自生地（桜区、さくらそう公園内）でボランティア活動をしていただける方を募集しています。活動内容は、現地での開花期の啓発（見学者への説明やパンフレット配布）や管理活動になります。

田島ケ原のサクラソウや文化財保護に興味のある健康な方であれば、年齢・性別は問いません。また、専門的な知識も必要ありません。開花期の活動できる期間だけで結構ですし、参加日数の制約等もありません。

県の花・市の花のもとになった田島ケ原のサクラソウの管理・啓発にあなたの情熱を注いでみませんか。

■問い合わせ■

電話で文化財保護課（048-829-1723）まで



田島ケ原にはこれ以外にもいろいろな形・色のサクラソウがあります。いっしょに探してみませんか。

田島ケ原サクラソウ自生地で「草焼き」を実施しました

平成20年1月15日から18日まで、田島ケ原サクラソウ自生地及び実験圃場^{じっけんぼじょう}で「草焼き」を行いました。これは、冬季に枯れたオギやヨシを焼き、その灰の持つ栄養分を土地に返してあげることなどを目的として、かつての方法に戻したものです。

従来、田島ケ原ではこの「草焼き」が長い間実施されてきましたが、平成9年度に「廃棄物の処理及び清掃に関する法律」が施行されたことに伴い、「廃棄物の野焼き」が「草焼き」と混同されることを懸念して一時中断していました。法律の施行以来10年が経過し、その違いの正しい理解が広まってきたことから、①草焼き中断の間、オギ・ヨシを刈り払って廃棄処分していたことによる土地の貧栄養化の防止、②「草焼き」実施による、刈り払いと比較しての土地の踏み荒らしの軽減等を目的として実施したものです。

昨年9月に「草焼き」再開の検討会を開催してその是非を検討し、文化庁への現状変更許可申請、国土交通省・消防等への届出、警察・JR東日本・地域住民等への周知を経て、当初12月中旬に実施の予定でしたが、

オギやヨシが枯れきっていないためにこの時期に順延したものです。

延焼防止の観点から、事前に幅2mほど刈り払いを実施して緩衝帯を設け、当日は風下側から火をつけましたが、あまり燃え広がらず、風上側から再度火をつけると、立ち枯れていたオギ・ヨシは高い炎と灰色の煙を上げて一気に燃え始めました。火が地面を這う時間は一瞬で、その熱が、サクラソウの地下茎に与える影響の小さいことは科学的データで裏付けられていますが、さすがに地上では火の高熱に圧倒され、近寄ることができませんでした。この4日間の作業で4haあまりの自生地と実験圃場は一面見通しの良い「原っぱ」と化し、そこには大量の灰に包まれた自生地が出現しました。

まもなく、自生地に見事なサクラソウ群落が出現する時期を迎えます。現在、田島ケ原サクラソウ自生地では約150万株のサクラソウとノウルシ・チョウジソウなど約250種の植物が自生していますが、今回の「草焼き」による灰のおかげで、サクラソウの生育にどれだけ良い影響が出るのか、非常に楽しみです。



▲秋の自生地の様子



▲立ち枯れたオギ・ヨシ



▲幅2mほどの緩衝帯（中央は園路）



▲風上側からの着火



▲燃え盛る炎



▲実験圃場での「草焼き」



▲燃え終わった直後の自生地



▲一面見通しの良い「原っぱ」に

さくらそう通信 23号

発行日 平成20年3月31日

編集・発行

さいたま市教育委員会

さいたま市浦和区常盤6-4-4

☎048-829-1723(文化財保護課)

「さくらそう通信」のバックナンバーはさいたま市のホームページでご覧いただけます。